

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.12 / 2007年 冬

コミュニケーション能力をつけるために、
自分の意思を文章にして相手に伝える訓練を。

地球となかよしインタビュー

どうやって相手に「伝える」か 池上 彰さん ②～③

知っておきたい教育NOW

①小中学校における学校評価の現状と課題 木岡一明 ④～⑤
②特別支援教育とそれが示唆するもの 穴戸和成 ⑥～⑦

名人の授業②「大村ばま先生 広野昭甫 ⑧～⑨

地球となかよしトピックス 地域とともに生きる力を育む学校 佐々木隆良 ⑩～⑪
インフォメーション 北から南から ⑫～⑬

BOOK REVIEW ⑭／「ラム10代心のカルテ その⑤ 香山リカ ⑮

「地球となかよし」メッセージ 2006 入賞作品発表 ⑯～⑰

ほっとな出会い イッヤー尾形さん ⑱





地球となかよし
インタビュー

どうやって相手に「伝える」か 池上 彰さん（ジャーナリスト）

言葉が誤解を与えることもあるんだよと教えていくことを
望みたいですね。

◆NHK「週刊こどもニュース」で十一年間 お父さん役としてニュース解説を務められました。最近、メディアで子どもの事件がよく報道されていますが、どのように受けとめておられますか。

マスコミの報道のあり方の問題もありますが、最近少年の事件が多いと、印象論で語られていますね。実は少年事件は、警察庁の統計で見ると一九五〇・六〇年代に比べれば激減しているんです。昔はマスコミも大して登載していませんでした。私が三十年前警察担当の記者だったころ、少年事件はどうせ名前が出せないからとニュースにしかかったことが多いんです。

ところがここ数年、ショッキングな少年事件が一つ起きると、また少年事件だと大きく取り上げてしまう。例えば、確かに神戸で非常にショッキングな事件は起きましたが、同じようなことは昔も起きていたんです。なのに、たまたまあった少年事件をどんどん書き立てるから多く起きているかのようになる。

また、以前もいじめで子どもが亡くなることはあったんです。中野富士見中事件では「葬式ごっこ」というクラスのために先生も加わっていた。衝撃的でした。

た。最近、先生がいじめに加担していたと問題になりましたが、全く同じじゃないかと。以前もいじめ自殺なんてとんでもない大きなニュースにして、どうしたらいいかとずいぶん文部省も真剣だったし、教育委員会もマスコミもずいぶん騒いだ。だから私個人は、最近になってこうなったという形になっていることに非常に違和感を覚えます。

一時期、十七歳による事件がとても多いと言われました。私が十代だったころで、大江健三郎が『セヴンティーン』という小説を書いたころです。十七歳の少年が社会党委員長を刺殺した時代です。それがしばらく忘れられていて最近また大騒ぎになっているという、繰り返しの部分があります。みんな、昔に比べて最近はどういう印象論で議論して、教育を何とかしなければいけないとなっている。一挙に、教育基本法を変えなきゃいけないとか。教育基本法を変える議論はいろいろあるにせよ、非常に印象論に傾いて、何か日本の教育はおかしいから変えなきゃいけないというのは、大変短絡的だなと私は思います。もっと冷静に、議論をするなら、ほんとうに事件はふえているのかを検証するところから始める必要があると思います。

あると思います。

もう一つ問題なのは、とりわけ子どもの事件は、報道することによって連鎖的に起きる。過去、女性人気タレントが飛び降り自殺して、それを大きなニュースにするとファンの後追い自殺が出た。それを大きく取り上げると続けて出る。各マスコミがしばらく取り上げないようにするとすぐおさまりました。

マスコミとしては、いじめによる自殺はとんでもないことだし、テレビでも新聞でも命の大切さを知ってほしいと言います。それで聞くかというところじゃない。いじめられていてほんとに自殺を考えている子にしてみると、そんなに大切な命を捨てれば社会に大きな影響を与えられるだろうか、いじめているやつらの名前を遺書に書いて残せばそいつらが困ったことになるか、非常にゆがんだことを考えたりするんです。



池上彰さんプロフィール

1950年生まれ。松本市出身。慶應義塾大学卒業後NHK入局。報道記者として、警視庁、文部省などを担当。1994年から2005年3月までNHK「週刊こどもニュース」でお父さん役を務める。現在はフリージャーナリストとして活躍中。著書は『相手に「伝える」話し方』（講談社現代新書）、『池上彰の新聞勉強術』（ダイヤモンド社）、『憲法はむずかしくない』、『おしえて！ ニュースの疑問点』（以上ちくまプリマー新書）、『そうだったのか！ 現代史』（集英社）など多数。

◆学校の対応が問題だという議論も強くなっています。

いじめが学校の中で行われていれば、とりあえず学校・先生の責任が追及されることになりませんが、これはしかたない面もあります。ただ、昔に比べて地域や家庭の教育力が非常に落ちていきます。私が小学生のころ、例えば家の近くで

たばこを吸おうとしようものなら、近所の目があつて、すぐ家に連絡が行きまいた。地域の人たちみんなが、あれはどのだれの子だとわかつている。今はそれがいいですよ。どうも近所の子らしいけどこの子かわからない。子どもにしても、あそこ口うるさいおじさんに叱られるぞというのがなくなつてしまつてい。また、家庭の教育力についても塾に通つたりして、学力は家でつけますからしつては学校でやつてくさいというような状況。本末転倒ですよ。

そういう状況の中で学校の先生が責任を問われるのは大変かわいそうだなと思います。以前は、子どもが何かやつたら、親が、うちのしつてがなつていなくてすみませんと先生に謝つていました。今、親が学校に怒鳴り込んでくるような状況。日本は先生方が大変なため、何でも抱

え込んでしまふ。家庭や地域の分まで学校の先生が抱え込んでしまつています。

また最近、文部科学省や教育委員会が学校を変えようとしてさまざまな取り組みをしています。先生がそのために報告書をたくさん書かなければならない。一段と雑用がふえています。以前は放課後じつくりと子どもとつきあつたり、勉強と全く関係のないところで遊んでくれたりするゆとりがありました。授業以外のところでの姿を見せることによつて、先生は子どもが抱えている問題に気がつくし、子どもは先生ではないひとりの大人として見る、触れ合う。そういう余裕が雑用に追われてなくなつてい。これはかわいそうです。

◆子どもの国語力の低下が言われています。

親がどうも過保護になつて、子どもの先回りをするんですね。子どもが言わないうちから、はいこれねと、単語一つ言うだけで親が察して全部通つてしまふから、子どもが単語だけで話をしてしまふようになる。自分で文章をつくつてそれを相手に伝え、わかつてもらつてという経験が減つています。

親があえて、ものわかりが悪くなる必要があるのではないか。「単語だけじゃわからないよ、それをどうしたいの」と、文章にして言わせる。文章にして言わないと相手に伝わらないんだよということをやつていかないと、単語だけでコミュニケーションがとれてしまつてい。ですから、子どもの表現能力というのが落ちてきているなという気がします。

学校でも先生が、時間がない、こまに進まなくちゃいけない、自分が作った教材研究の中ではすぐに進むはずだと

子どもが答えるけれど、時間がないからと、こういうことだろうとまとめてしまふ。ほんとうは「どういうこと、もう少し説明して」というようにじつくり我慢をし、他人に自分の意思を伝えるためには文章にしていけないと、あるいは自分がわかつていだけで言つて相手にわかつてもらえないんだ、伝えることができないんだと自覚させる。そういう形にしていけないといけません。

こどもニュースの場合は、一生懸命難しい言葉をわかりやすく説明しようとしていました。でも、エジプトのルクソールでテロ事件があつたときのことです。このときに、「ルクソールとはナイル川のほとりにある町です」と説明しようとする、子どもが「ほとりって何?」と言ふんです。じゃあ「ほとり」を「近く」つて言いかえようかと思つたら、先輩がちょっと待てと。よく考えてみたら川の中に町があるわけではない。うんと離れたいたら、ナイル川という例えを出さない。ほとりという言葉がわからなくても、何かナイル川の近くということらしいと文脈からわかるはずだ。これは、あえてこの言葉をこのまま使つべきだと。つまり、そうじゃないと新しい言葉つて覚えてい。言いかえなくても、この文脈ならこういう意味だろうとわかる言葉はあえて意地悪になつてそのまま使つことも大事じゃないか。ほんとうに推理ができないような言葉は言い換えてあげなくちゃいけないけど、推理ができるものは推理させようということなんです。

◆コミュニケーション能力についてはどう感じですか。

インターネットの書き込みで、うざい

とか言われて頭にきた、なんて大きな事件になることもあります。これはまさにコミュニケーションの後退です。ネットの書き込みや携帯のメールでは非常に短い言葉になる。こういう意味で伝えているのに、相手は思いもよらない受け止め方をするというのが幾らでもあるわけです。これから先生に望みたいことは、実例をもつて、言葉が誤解を与えることもあるんだと教えることですね。例えば携帯のメールで、こういうつもりで送つたら相手がこんなふうにと受けて怒つちやつてびっくりする、というよう。だから、こういうメールを読んだら誤解されないかな、誤解されないようにもう少し丁寧に書こうとか、そういうことを考えるべきなんだと教えることが大事だと思います。

あるいは絵文字の問題があります。直接会つていないときには、ほんとうはこういう意味だと委細を尽くした文章で誤解を与えないようにしなければいけないんだけど、今の子どもたちはそれだけの文章力がないんですね。本来文章で説明すべき自分の気持ちを絵文字で伝えようとしてしまつてい。誤解を与えないようにしよう、何とかコミュニケーションをとろうという工夫ではありますが、人と人が対面したときになかなか言葉として表せないということになつてしまふから。ほんとうにコミュニケーション能力をつけるためには、例えば授業で、絵文字を使わないで、文章だけで、絵文字で伝えようとした意味を書いてもらふと教えてみては、どうでしょうか。

相手に自分の気持ち、考えを文章で伝えることの訓練が必要だと思います。



1 小中学校における学校評価の現状と課題

名城大学大学院教授 木岡一明



1 義務教育の質保証と学校評価

これまでも、学習指導要領の改訂とほぼ時期を同じくして、幾度か学校評価ブームがありました。しかし、国が学校評価のガイドラインを示して全国の学校評価に一定の水準確保を求めていくことまでは見いだせない発想です。

では、何がその動きを促したのか。第一に「経済財政運営と構造改革に関する基本方針二〇〇五」（いわゆる骨太方針）にあります。ここにおいて、「評価の充実、多様性の拡大、競争と選択の導入の観点をも重視して、今後の教育改革を進める」とされ、「義務教育について、学校の外部評価の実施と結果の公表のためのガイドラインを平成十七年中に策定する」ことが提起されたのです。

さらに、「低学力」問題を背景にして、自民党義務教育特別委員会による「国家戦略としての教育改革（中間報告）」において、「我が国においても、総合的な評価システムを導入し、義務教育の質的向上を図ることが急務」との考えに立ち、「学校の管理運営や教育活動などについて保護者や学校評議員などの意見も反映した自己評価を必ず行うという仕組みが必要である。その上で、学校設置者などによる外部評価を行う仕組みを整える必要がある」、「国としても全国的な観点から、学校を巡回し、学校の管理運営

や教育活動などについての評価を行うとともに、必要な指導・助言・援助・勧告等を行うことができるような制度を設けるべき」との国家的規模による評価制度の確立が示されたことにあります。

そして、中央教育審議会でも、義務教育費国庫負担問題をめぐる審議を通じて、①学校の自己評価の実施と結果公表の義務化、②公表された自己評価結果を外部者が評価する方法を基本として外部評価を充実、③第三者機関による全国的な外部評価の仕組みを含め、学校・地方自治体の取り組みの評価を充実、といった指摘がなされ、その答申「新しい時代の義務教育を創造する」（平成十七年十月）では、「国の責任によるインプット（目標設定とその実現のための基盤整備）を土台にして、プロセス（実施過程）は市区町村や学校が担い、アウトカム（教育の結果）を国の責任で検証し、質を保証する教育システムへの転換」が説かれたのです。

2 これまでの学校評価を見直す

(1) 評価時期をめぐって

学校評価というと、年度末に行うというのが決まりのようになっていたのではないのでしょうか。しかし、これまでの学校評価が徒労感を募らせてきたのは、一つには、年度末の慌ただしい時に、この一年間の学校活動のすべてにわたって評価し、実際に誰

がその学校に残留するかも明確でない新年度に向けて改善策を立てようとしてきたからでしょう。こうした轍を再び踏まないためには、文部科学省が示した「義務教育諸学校における学校評価ガイドライン」でも「教育活動の区切りとなる適切な時期に行う」として、年度末に限らない柔軟な見方を示しているように、年度末とか学期末など一定の周期末に実施するだけではなく、できる時に実施し、その結果をファイルしていわばポートフォリオのように累積的・形成的に取り組んでいくことが大切です。

今年からさらに新たな学校評価を展開している品川区では、学校評価の区切りを従来の三月期から七月期に移し、各学校が八月に評価結果をもとにした計画や戦略を練って九月からの一年間を見越すという新たなサイクルを打ち出しています。学校評価がうまく機能しなかったのは、評価の基準となる学校目標や計画が現状分析に見合う十分な時間が保障されないうで定められていたことによる、との反省がそこにあります。この新サイクルによって、長期の観察・検討期間を経て計画が策定されることになり、これまでの計画の脆弱性やあいまいさを克服し、形成的評価が容易になるし、人事異動や入学によって変動する年度初めの学校体制の動揺にも、一定の方針と計画で臨めるようになるでしょう。

(2) 評価結果の検討方法をめぐって

全体を緻密にとらえようとするから、細項目主義に陥り、各項目を評価することに忙殺されてしまうのです。しかもよくあるのは、回答結果から、「平均で四以上のところはしつかりやれていて、しかし一方で平均が二以下のところは課題であり、よくやれているところを維持しながら、この課題のところをどう乗り越えていくかが問題となる」という結論が示されて終わっている場合です。

でも、みんながよいとかみんなが悪いということ

は、わざわざそんな手続きを経ないでもすぐわかることでしょう。その一方で、意見の分かれた項目も平均化の手続きが加えられて中程度に位置づけられてしまう。しかし、ある実態を共通に眺めていながら意見が割れる事柄こそ、その学校が抱える問題です。ところが、その見解の相違をぶつけ合わないで問題がないとされてしまうことが問題なのです。

確かに異論が大いにあるということを承知で議論しようとする、相当覚悟が要ります。差し迫った事情がない限り、そうした問題は避けられてきたのでしようが、先送りしてきたことが人々の不信感のもとにもなっているのです。もちろん、あまり多くの問題に一度には向き合えません。向き合う覚悟が整った事項について広く意見を求めつつ深く議論を重ね、事態を打開する手だてを講じていくという流れが重要なのです。

ただし、資源の限界はあるので、できることから取り組むこと、実現可能性を高める資源獲得の手だてを講じることが不可欠です。

3 「これからの学校づくりの視点と学校評価」

いくら学校評価を「適切」に行っても学校自体が変わらなければ、これまで繰り返してきた徒労感をぬぐえません。いかに学校づくりを進めていくか、という問題の流れに学校評価の諸側面を位置づけてこそ、生きて働く学校評価となります。

(1) 人々の期待以上の効果を生む

最近の論調では、学校評価は「説明責任」を果たすため、といわれることが多いのですが、いくら説明したところで、相手が納得しない限り、その責任を果たしたことになるはずではありません。必要なのは、①人々が期待する以上の結果（効果）を生み出すこととであり、②その生み出した効果を、相手が理解や

納得のできるかたちで示すことです。

そうは言っても、人々の期待の把握や、その期待以上の効果をいかに生むか、またどうすれば理解や納得を得られるか、という問題があります。しかし、いずれにしろ学校自らが動き始めないことには、不信感に取り囲まれた学校の状況は変わらないのです。

結局、学校としてできることしかできないのであり、期待されていることのなかで学校としてできること、かつ、しなければならぬことを探っていくしかないと言えます。

(2) 人々の声を聴く

したがって、まず人々が何をこの学校に期待しているかを聴き、期待内容を知ることです。ただし、学校が担う教育課題は、聴くまでもなく種々の法令や学習指導要領などに定められているし、自ら律していくべき役割です。その役割遂行において、自らでは判断しがたい事柄について聴くのが大前提なのです。問題は、誰から、いかに聴くかでしょう。

最近、各地で取り組まれてきている授業評価は、児童生徒からの声を聴く方法の一つです。また、行事後や学期末、年度末に行われている保護者アンケートも、その一つです。学校評議員などからのヒアリングもその一種です。

ただし、学校として知りたいこと、かつ、学校では把握できないことを、答えるにふさわしい人から聴くべきです。その点で、一律に配布されるアンケート形式は、回答できる人以外からも聴いてしまう危険性があることに留意すべきです。

もちろん、社会調査の手法に則った質問項目作成や尺度構成であるべきことは言うまでもありません。また、教師言葉が頻繁に用いられるのは、教育に通じていない回答者は意味をつかめなくなるので、用語には特に注意しましょう。

(3) 重点化を図る

このようにして集められた人々の声をもとに、わが校として何をなすべきか（ミッション）を定めることが次の問題です。しかし、そこで不満解消などと守りに入ってしまうべきではありません。攻めの学校づくりへと向かっていくことが必要なのです。

攻めの学校づくりとは、学校の強み（長所）を活かして学校のよさを発揮し、さらに強みを強化していく働きかけと組織づくりを指します。そのためにはまず、自校の内外環境と、ミッション（存在価値・使命）を照らし合わせ、外部環境にある支援的要因（たとえば協力的な保護者、地域教材としての文化遺産など）を探り出すことです。さらに、その支援的要因と繋がる学校内部の強みを探り、そして、両者をどのように結びつければよいのかを考えて、重点的に取り組む課題を設定することが重要です。

そのような攻めの経営と評価によってこそ、手応えのある取り組みができるのです。充実感をバネに、自らを肯定的に評価できるようになり、課題達成の程度を公表しようという勇氣や元気が湧いてくるでしょう。そして、外部からの賛辞や射た評価は手応えと協力関係を実感させることになり、学校組織を螺旋的に開発していく動機づけとなります。

その開発過程において忘れてならないのは、現有資源の限界です。自力だけではできないことがたくさんあるので、できることから取り組む構えと、実現可能性を高める資源獲得（外部調達と内部開発）の手だてを講じることです。

【参考文献】

- 木岡一明著『学校評価の「問題」を読み解く』（教育出版 二〇〇四年）
- 窪田眞二・木岡一明編著『学校評価のしくみをどう創るか』（学陽書房 二〇〇四年）

2 特別支援教育とそれが示唆するもの

文部科学省初等中等教育局視学官 宍戸和成



1 特別支援教育への移行

平成十三年一月の省庁改編により、文部省は文部科学省となり、障害のある子どもたちの教育を所管する初等中等教育局特殊教育課は、特別支援教育課へと名称を変更した。初めて「特別支援教育」という名称が法律上（文部科学省組織令）に位置付けられた。しかし、特別支援教育そのものの定義については、後々の学校教育法等の改正に委ねられることになった。「特殊教育」という名称については、従前から様々な意見や、改めたいという動きもあった。

平成十三年一月には、「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」が、平成十五年三月には、「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が、それぞれ文科省に設けられた調査研究協力者会議から出されている。前者においては、特殊教育の

枠組みの中で、就学指導の在り方を見直したり、LDやADHD等の子どもたちへの対応を工夫したりすることが提言されたが、後者においては、特別支援学校や特別支援教室の設置を提言するなど、革新的な内容であった。したがって、改めて制度的な観点から議論すべく、平成十六年二月に、中央教育審議会の下に特別支援教育特別委員会が設けられ、二年近くの審議を経て、平成十七年十二月によく中教審において「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」が取りまとめられた。

この答申においては、盲・聾・養護学校に在籍する児童生徒のうち、半数近くが重複障害学級に在籍するなど、障害の重度・重複化への対応が喫緊の課題となっていることから、障害種別を超えた学校制

度（特別支援学校）とすることが適当であること、特別支援学校の新たな機能として、小・中学校等への支援を行う「センタース機能」を位置付けること、また、小・中学校においては、特殊学級や通級による指導を見直しつつ、当面はそれらの弾力的な運用について検討することなどが提言された。

その後、文科省はこの答申の内容を受けて、関係法律の改正案を作成し、それが第百六十四回通常国会に上程され、平成十八年六月に「学校教育法等の一部を改正する法律」が成立した。その結果、平成十九年の四月一日をもって、「特殊教育」が「特別支援教育」へと移行することになった。

この六年間は、特殊教育にとってまさに激変の時期であった。

2 「学校教育法等の一部を改正する法律」について

学校教育法においては、盲・聾・養護学校を特別支援学校に移行することから、第一条や第七十一条等が改正されることとなった。当初、すべての特別支援学校が複数の障害種に対応した学校になるのかという懸念があったが、これについては、設置者や学校が主体的に判断し、ある特定の障害種を専ら担当する学校も設置可能になった。したがって、これまで通り、例えば聴覚障害児の教育を専門に行う特別支援学校（聾学校）も維持継続できるわけである。

また、従前の盲・聾・養護学校が教育相談として実施してきた障害のある子どもやその保護者等への対応についても、今回、特別支援学校の新たな機能（センタース機能）として、第七十一条の三において位置付けられた。

さらに、これまで小・中学校において設置されてきた「特殊学級」は、第七十五条の第二項において、「特別支援学級」と改められ、今後も継続して設置されることとなった。同様に、「通級による指導」についても、学校教育法施行規則に基づいてこれまでと同じように実施されることになっており、特別支援教室構想については、もう少し時間をかけて検討することとなった。

なお、教育職員免許法の一部も改正され、盲・聾・養護学校免許状は、特別支援学校免許状に一本化されることとなったが、「特別支援教育領域」という新たな考え方が示され、例えば聾学校免許状において担保されていた専門性が、特別支援教育領域の一つである「聴覚障害者に関する教育の領域」として位置付けられ、その領域の指導を担当するために、聾教育の専門性にかかわる指導法等の単位の修得が求められることになった。

特別支援教育においても、これまで以上に障害種別の専門性の継承が重要となる。

3 特別支援教育が示唆するもの

明治十一年に京都盲啞院で始まった盲や聾の子どもへの教育を特殊教育の始まりとすれば、百三十年ほどの歴史を経て、今、特別支援教育へと移行していく。そこには、近年の特殊教育を取り巻く国内外の動向（ノーマライゼーションの進展 や小・中学校等の状況の変化（LD等の子どもの顕在化）が少なからず影響している。

それらについて、次の視点から考えてみたい。

(1) 小・中学校教育と特殊教育との重なり

聾教育の世界では、聞こえないことの原因を探っていく中で、「末梢性の聾」と「中枢性の聾」という表現が使われた時期がある。前者は、聴覚器官である外耳（鼓膜）や中耳（耳小骨、内耳（蝸牛））に何らかの損傷があり、それで聞こえないという状態を

指している。一方、後者は外耳や中耳、内耳には障害が見つからず、それ以降の聴覚神経や聴覚中枢（大脳）に何らかの損傷があり、それによって音声の認知できにくい、言葉の聞き分けができにくいというような状態を指している。つまり、聾教育の世界でも、今日話題となっているLD（学習障害）全般的な知的発達に遅れはないものの、読み、書きなどに著しい困難が見られる）の状態像が指摘されていたわけである。聞こえないことへの対応は困難を極め、未梢性の聾への対応に傾注することとなり、それが今日の聾教育へと発展したわけであるが、自ずと今日のLDと思しき子どもへの指導にも取り組んでいたことになる。

LDやADHD等の子どもたちは、全般的な知的発達に遅れがないことから、小・中学校の通常の学級に在籍し、そこで教育を受けているが、読み書き等教科指導上の課題が、今日クローズアップされるようになってきた。特殊教育における個々の実態に応じたきめ細かな指導内容・方法等の工夫は、LDやADHD等の子どもの指導においても活用が可能である。

特別支援教育へ移行することにより、LDやADHD等の子どもも教育の対象となった。今後は、盲・聾・養護学校（特別支援学校）から小・中学校の特殊学級（特別支援学級）、通級による指導、そして小・中学校の通常の学級へと続く連続線の中で、子どもの実態に即した教育が行われることになる。これまで培われてきた特殊教育の財産をセンター的機能として広く小・中学校にも提供することになる。もちろん特別支援学校においても、小・中学校の指導のノウハウを活用し、工夫していくことは当然である。

以上のことから、特別支援教育は、障害のある子どもとない子どもの教育を相互に結び付けていく働きをするものであることになる。

(2) 小・中学校における「個に応じた指導」

個に応じた指導は、特殊教育の専売特許でもある。なぜなら、障害の状態は個々に異なるし、興味・関心も障害の有無にかかわらず多様である。平成元年の学習指導要領改訂時に小・中学校の学習指導要領に、初めて「個に応じた指導」が盛り込まれたが、盲・聾・養護学校の学習指導要領においては、それ以前から「個人差に即応した指導」として盛り込まれ、重要視されていたのである。

平成元年に小学校等の学習指導要領において、個に応じた指導が位置付けられたものの、小学校等においては十分定着するには至らず、平成十年の改訂では個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導などの具体的な例示も行われた。小学校等においては、個に応じた指導を必要としている児童が多く、その中にはLDやADHD等の子どもも含まれている。特別支援教育に移行することは、こういった小・中学校等の指導方法の工夫・改善にも光を当てることになる。

(3) 特殊教育の発展形としての特別支援教育

特別支援教育は、とかくLDやADHD等の子どもへの指導と誤解されがちである。確かにこれまで十分な対応がなされてこなかった分野であるだけに、それが話題になることは仕方ない。しかし、特別支援教育の対象は、特殊教育で対象としてきた子どもたちも含まれるのである。例えば、視覚障害や聴覚障害の子どもたちへの指導も、これまで同様行われ、充実が図られる必要がある。

特殊教育で重視してきた個に応じた指導をより発展させた形で個々の子どものニーズに応じた指導へと結び付けていかねばならない。その際、ニーズとは何かという視点を明確にする必要もある。単に問題目に終わることなく、具体的な指導内容・方法として確立していく作業が大切である。特別支援教育は、特殊教育の発展形として、これからその具体的な

な姿を形作っていく必要がある。

(4) 適切な指導と必要な支援

特別支援教育を創造していく上では、教育の分野における「指導」と「支援」の使い分け、あるいは概念規定が必要である。

今日、発達障害者支援法や障害者自立支援法というように「支援」という表現が多用される。教育の分野においても、一時期、「指導」を子どもの主体性を損なうものとして敬遠し、子どもに寄り添うというニュアンスから「支援」という言葉に置き換えられることがあった。本当にそうなのかという思いもあったが、最近では、特に障害者にかかわる分野で支援が多用されている。

聾教育においては、言葉の指導が重要視される。聞こえにくい子どもにも日本語を身に付けさせることが教育目標の一つとされ、様々な角度から実践が試みられてきた。時には、子どもの気持ちを斟酌せず、押しつけに近い指導も見受けられた。しかし、その反省に立ち、子どもと教師の共感的な関係を作り、その中で場や気持ちに即した適切な言葉の投げかけによる言語指導が主流となった。そうした経験を教訓とすれば、支援の立場を踏まえた意図的な指導が大切である。

特別支援教育に移行する際にも、聾教育が経験した教訓を生かすことが必要であると思う。つまり、支援することを尊重するあまり、指導の適時性を失わないようにすべきである。

また、特別支援教育は支援を受けるということを前提としたものではない。あくまでも教育活動の一端で考えられる必要がある。子ども自身が身に付けるべきこと、その可能性がある場合には、あきらめることなく追求すべきであると思う。

特別支援教育も、特殊教育と同様に「可能性の追求」の視点を大切にし、子どものもっている力を最大限に伸ばす教育でありたいものである。

伝えておきたいあの先生の授業、それはまさに達人の技・名人の境地。このコーナーでは、そんな先生方の伝説の授業の秘密を解き明かします。

第2回目の今回は、作文・書くことの指導を中核としてこられた国語教育の実践・研究者、大村はま先生の授業を広野昭甫先生にご紹介していただきます。

名人の授業 vol.2 大村はま先生

生きてはたらく学習「実の場」の先駆者

● 前文教大学講師 広野昭甫 ●

1. はじめに

大村はま先生は、平成17年の春、白寿を前にして不帰の客となられた。不世出の国語教育者として、全国の実践家に多大な影響を与えてきたこと、いや今も与えつづけていることは、つとに知られているところである。教師のプロとして、常に厳しく自らを律し、国語科教育のあるべき姿を、総体的に、かつ、体系的に具現してこられた業績は、汲めども尽きない貴重な遺産となっている。

2. 文集作りを“実の場”で

幸運なことに私は、大村先生の最終勤務校、東京都大田区立石川台中学に5年間（1972～1977）在職することができた。この5年間における最大の成果が、異学年間提携学習という、かつて経験したことのない創造的な実践だった。大村先生担当の一年生が、3学期の終わり、新入学の一年生に石川台中学校を紹介する文集を作り、後に私が担当する新一年生にもたらされ、相互に学習材を生産しあう授業へと展開していくものである。

その詳細は、1冊の本にも収まりきらないほどの内容



ゆえ、ここでは、大村先生ご指導の単元（新一年生に石川台中学校を紹介することとする）にスポットをあて

まずこの単元を設定した理由として、次の三つを挙げることができる。――①今まで最下級生であった一年生が、ほどなく迎える新入生に対し

て、いちばん先輩らしい気持ちをもっているということ。
②文集作りを通して、作文の総復習ができるということ。
③手作りの文集が後輩たちに読んでもらえるということ。――現実の目的をもって学んだ成果が直接後輩の手に渡る、まさに生きてはたらく体験を得させる最良の単元と言えよう。大村先生は、このような単元の進め方を、“実の場”と銘打ち、数々の実践を世に問うておられる。

その実の場を確かにするために、学習材や指導法についての周到な準備と綿密な検討が始まるのである。どのような力がつくか、どのような言語活動の場があるか、ということを常に念頭において、文集の内容をさまざまな視点で洗い出していく。次に列挙するのが、その具体例である。

- 学校の歴史（紹介――事実をもとに、正確にわかりやすく）
- 校歌・校章（説明――校歌については意味の説明も）
- 生徒会の組織・きまり（説明）
- 校舎内外、先生がた、クラブ活動、学校生活、学校行事（説明・紹介）
- 遊びのページ（お話とかクイズとか）
- 石中八景（写真や短いコメント）
- 先輩としてのアドバイス

何を書いたらよいか、どういうことを伝えたらよいか、といった文集の内容がバランスよく調えられている。そして、教えるべきこと、助言すべきこともきめ細かく検討されていることがわかる。

かくして、この単元は力強く始動していくのであるが、その導入については、大村先生ご自身の実践記録（「創造をめざす国語教室」昭和49年）で見ることにする。

- 新入の一年生に、石川台中学校を紹介する文集であ

る。石川台中学校はこんな学校だ、と一年生に話そう。

- 石川台中学校の精神、目標、生徒手帳をよく読み直して書こう。
- 校章の由来も入れよう。
- この学校は、何年に建ったのだろう、石川台中学校の歴史も紹介しよう。学校要覧がここにある。ただ、このとおり書き写したりするのではない。おもしろく読めるよう、くふうがいる。どこもそうだが、ここは特別にも。
- 生徒会の組織、活動、選挙のこと。
- クラブ活動のようす。クラブをきめる手づきは、どういうふうにするのだろう。
- 校歌も紹介する。
- 先生がたを紹介する。
- 校舎内の案内。図書館、理科室、そのほかいろいろの特別室。掲示板のあるところ。
- 学校行事、これもぜひ紹介する。遠足はいつあるのか。
- 図書館にある、おもしろかった本も紹介するとよい。
- 中学校の勉強のこと、この1年にやってきた単元の紹介。国語教室通信のこと、ここにある見本を入れて説明する。
- お楽しみページを作るとよい。お話でもクイズでも。ただし、クイズなど、何かの本から見つけて、写して入れることはしない。自分たちの作ったものを。
- 「石川台八景」はどうか。八つ、見つけるのは、ほねが折れそうだが、写真を添えてもいい。
- それから一年生へのアドバイスを。す。「一生けんめいやりなさい」などというのはだめ。自分の1年間の中学校生活の体験から得たものを。
- どれも、わかりやすく、読みやすく、おもしろく。ただし、おもしろいということは、必ず笑っている、ということではない、ふざけることと同じではない。
- いろいろの作品の並べ方、編集もくふうのしどころ。目次をじょうずに。
- 文集の名まえも考える。

このように導かれると、生徒たちは作ることにわくわくし、いろいろなアイディアが浮かんできたようである。

4 または5人のグループで、日程や分担を決め、先生の助言を仰ぎながら原稿を書き、レイアウトにくふうし、目次を立て、最後に文集の名まえを考える。制作に要した時間は、準備と発表会を含めて17時間。発表会というのは、各グループが、自分たちの文章のおもな内容、苦労したこと、自慢したいところを紹介しあう、いわば

相互啓発の場である。

この紹介文集の制作にあたっては、必ず原稿を先生に見せてから清書するという条件がついていたので、指導者の忙しさは創造するに余りあるものがある。やがて入学してくる新一年生のために、文章はもとより、文字もきれいに、そして、誤字・脱字のないようにと、本気で取り組んでいった様子がかがえる。

五つのクラスから、9 または10冊の文集が編まれ、計47冊ほどできあがった。新一年生1クラス分を優に超す冊数である。

3. 念には念を

新二年生になった生徒たちは、満を持して新入生を待っていたはずであるが、年度が変わっても大村先生は指導の手をゆるめなかった。クラス替えがあったことをチャンスと捉えて、他のグループ、他のクラスの文集を読みながら、字の誤りを正すという学習を設定されたのだ。誤りに気づいたら、その箇所につせんをはって、制作者に検討と訂正をうながすという作業。まさに、読み手に配慮した“実の場”の最終章である。

さて、精魂こめて作られた紹介文集を手渡されたのは、五月の半ばごろであった。

どの文集も、新入生に読んでもらおうとするくふうのあとがありありと見える。表紙や目次の美しさといい、内容の豊かさといい、中学一年生の作とは思えないほどのできばえである。

二年生がこの文集を作った趣旨と、あとで礼状を書くのだということを簡潔に話して、ひとりひとりに一冊ずつ現物を手渡したところ、はたせるかな、ひとり残らず、すうっと引きこまれていった。入学以来、これほど食い入るような姿を見たことがない。“実の場”の底力を改めて実感したしだいである。



地域とともに生きる力を育む学校

— コミュニティ・スクールの可能性を求めて —

福岡県朝倉市立秋月中学校教頭

佐々木隆良



秋月中学校の紹介

筑紫路の小京都と呼ばれる秋月は、八百年前、中世秋月氏が、この地に入封して以来、町づくりを行ったことにはじまる。特に、江戸時代に入ってから、秋月黒田五万石（福岡藩の支藩）の城下町として栄えた。現在も往事の繁栄を偲ぶ歴史的な建造物や文化遺産などが点在し、多くの観光客を満足させている。秋月観光の中心は秋月城址とその周辺であるが、本校は秋月城址にあり、校地に隣接した梅園、杉の馬場など豊かな自然環境にも恵まれている。本校は、昭和二十二年に開校し、地域の豊かな自然や伝統文化を教育活動に生かしながら特色ある学校づくりを行ってきた。しかし、近年、過疎化や少子化が進み、生徒数が減少している。因みに、本



紅葉の黒門（秋月城址）

年度の生徒数は開校以来、最も少ない九十九名になっている。

このような中で、地域や保護者の本校の教育に対する期待は大きく、学校行事やPTA活動等に対して、積極的に参加してもらっている。また、国の財政再建と構造改革に伴い、国庫補助等の教育予算が削減されるなか、本校においては、毎年、PTAはもとより、学校後援会、校区育成会、城址会（同窓会）等から教育活動費の補助を受けている。

コミュニティ・スクール調査研究事業の取り組み

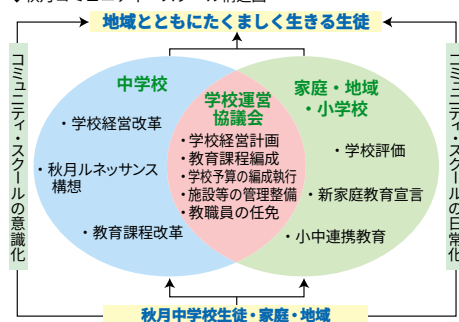
本校では、平成十八年度から二カ年間、文部科学省のコミュニティ・スクールの調査研究事業の研究委嘱を受け、コミュニティ・スクールの実践的研究に取り組むことになった。

コミュニティ・スクールを推進するために、地域の充て職や校長、PTA関係者、学識経験者、小学校校長からなる学校運営協議委員（十名）を任命し、学校運営協議会を立ち上げた。学校運営

協議会では、運営協議委員にどんな学校であってほしいのかを意見聴取するとともに、地域や保護者の思いや願いを大切にしたい学校運営を行うために、生徒や保護者、教職員を対象に本校教育に関する要望等についてのアンケートを実施して、学校のミッション（使命）を明らかにした。また、学校運営協議会の中では、地域の学校としてミッションに応えるために、どのような教育活動を展開すればよいのかについて自由に意見を出し合い、学校経営のあり方や指導の重点について検討していった。

その結果、秋月の豊かな自然や伝統文化等を十分に生かしながら、一人一人の生徒に確かな学力と豊かな心を保障することを確認して「地域

◆秋月コミュニティ・スクール構造図



とともにたくましく生きる生徒」を育むことを学校教育目標に掲げ、教育活動を展開していくこととした。

組織マネジメントの導入

学校教育目標を具現化するために、学校の内的環境としての強みと弱み、外的な環境としての機会と脅威になっている要因を洗い出すSWOT分析を導入して具体的な取り組みの焦点化を行っている。

また、学校教育目標の具現化に向けた取り組みの実施にあたっては、計画倒れに陥ることがないように、いつ（期限設定）、誰が（役割分担）、何を（取り組みの内容）、どのように（方法）行動していくのかを実効策展開シートにまとめて展開している。学校経営や教育活動を展開していく中で、取り組みの進捗状況を把握することは大切なことである。その際、学校経営や教育活動に問題点があれば、迅速に軌道修正を行った

り、方法を変更したりすること、教育的な問題やニーズが多様化している現在の学校では、必要不可欠だと考えている。そこで、本校では、学校評価の全体構想を作成して、PDCAのマネジメント・サイクルを導入し学校経営の工夫改

◆SWOT分析

実効策検討シート（役割分担）

項目	実効策	期限	誰が	何を	どのように
学校便りの充実	経営の重点との関連で毎週1回学校便りを発行	7/18	校長	学校便り	学校運営協議会等のコラムを工夫する。
説明責任の徹底	事前と事後を徹底するためにスケジュール表を作成	7/18	校長	通知文	1週間ごとに、地域・保護者・運営協議会に説明責任を果たす。
学校評価システムの構築	学校評価の全体構想を作り、校務分掌ごとに評価表作成	7/18	教頭	自己評価自己点検	五つのミッションから自己評価表を作成し、学校評価システムを構築させる。
CSのリーフレット作成	校内コミュニティ委員会で作成	8/4	教頭、教務主任、研究主任	取り組みや校内研の特色	分担をし、リーフレットを作成する。

善に努めている。

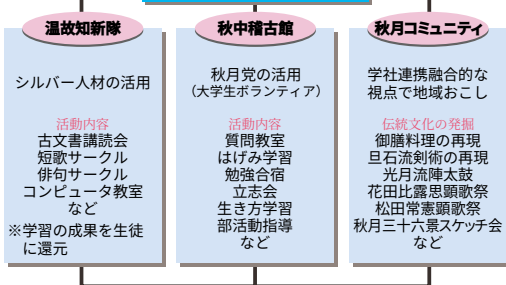
秋月ルネッサンス構想

コミュニティ・スクール推進事業の目玉として位置づけている取り組みが秋月ルネッサンス構想である。秋月ルネッサンスとは、真に、秋月の文芸復興を意味し、城下町が栄えた江戸時代にもまして学問や文化を盛んにしようとするものである。本校においては、この取り組みをとおり、確かな学力や豊かな心を育むことをねらっている。秋月ルネッサンス構想は、秋中稽古館の取り組みと温故知新隊の取り組み、秋月コミュニティの取り組みの三つの柱から構想立てを行った。

まず、秋中稽古館の取り組みについては、本校の卒業生を中心とした大学生による学習支援ボランティア「秋月党」を組織して、本校生徒に学習指導や適応指導、生き方指導などを行うものである。通常の活動としては、三年生を対象に、放課後学習として「はげみ学習」の時間を設定し、秋月党を活用して、学力の補充・発展の時間に充てている。また、夏季休業や冬季休業期間中に、質問教室や勉強合宿を行い、学習指導や適応指導を行っている。

次に、温故知新隊の取り組みについては、学校の施設を地域住民に開放し、秋月の歴史、文化、伝

秋月ルネッサンス構想



統を学んでもらい、その成果を中学生に還元することをねらっている。

城下町、秋月には秋月郷土館があり、藩政時代の古文書や美術工芸品など貴重な文化財が所蔵されている。そこで、学校施設を開放して古文書講読会を立ち上げ、文化の掘り起こしに努めている。

一学期には、秋月郷土館に所蔵されていた「御館御献立」を解説して、藩政時代の御膳料理を家庭科教師を中心に地域の人々や生徒が再現することができた。

さらに、秋月コミュニティの取り組みは、小中連携、学社融合的な視点で伝統文化の発掘や地域おこし、健全育成などを行うものである。学校と家庭、地域、小学校が一体となって観月会や防犯駆伝大会などを行うことができた。

最後に、コミュニティ・スクール調査研究事業の一年目の成果と課題として、次のようなことが明らかにになった。（○＝成果、●＝課題）

- 地域のひと、もの、ことを活用した教育活動が展開されるようになったこと
- コミュニティ・スクールの考え方が地域住民に認識されるようになったこと
- 組織マネジメントの考え方が定着し、効率的な運営を意識するようになったこと
- 小中一貫教育に向けた九カ年を見通したカリキュラムを作成すること



御膳料理の再現

福島県

かわまた教育推進プラン

～川俣町学力向上の取り組み～

川俣町立川俣小学校校長

藁谷和典

川俣町教育委員会では平成17年度から、確かな学力と豊かな心をもつたくましい子どもを育てることを目標に「三つの学習プラン」を策定した。町内の5幼稚園、8小学校、2中学校では、その計画に基づく実践を重ね、大きな成果を上げてきている。

一つめは、「読み聞かせ・読書学習プラン」である。

幼稚園・小・中学校を通し、日課の中に読み聞かせや読書の時間を確保することにより、読書の習慣を形成させ、豊かな情操を育てるとともに、学習の基礎となる、読む・書く力を身につけさせる事をねらいとしている。地域のボランティア等の協力も得て、各園・各校の創意ある活動が展開されている。

二つめは、「土曜・長期休業学習プラン」である。

小学校3年生から6年生までの希望する児童を対象に、学区内の10の公民館を会場とし、月1～2回(年14回)の土曜の午前中に3時間、国語と算数の学習指導を行っている。経費は無料で、指導は教育委員会が委嘱した教職経験者11名が担当している。学習指導の他に教育相談等も行っており、児童は毎回の学習を楽しみに通っている。

三つめは、「集団体験学習プラン」である。

これは、体験・交流・集団生活を通して豊かで健全な心を育成することをねらい、複数の学校が合同で町内の合宿所で2泊以上の自然体験活動を行うものである。本年度は8小学校の4年生が隣接校と合同で、美しい施設を存分に活用し、自然観察や制作活動、音楽やスポーツを通じた交流を深めることができた。

教育委員会・園・学校・保護者・地域の連携のもと、川俣町の総合的な学力向上の取り組みは、着実にその実を結び始めている。



北海道

校花サルビアをもとに愛校心を育む

～サルビアの栽培と道德の学習との横断的な指導～

札幌市立伏見小学校校長

南木輝雄

本校の校花は、サルビアである。初代校長永易盛義氏が、前任校から苗を持ち込んで育て始め、以来ずっと種を絶やさずに、38年間毎年花を咲かせてきた。

サルビアの花は、小さな単位の花が集まり一つの大きな花を形成している。「一人一人のよさを生かし、みんなで一つのものでつくりあげる」という意味合いを見出すことができる。また花言葉は「情熱」であり、「意欲的に学ぶ」という本校の教育の姿勢と合致する。途中校舎改築の折、一時途絶えかけたが、地域の園芸農家(関井勝治氏)の助けによって危機を脱し、38年間ずっと花を咲かせ続けている。市販のサルビアとは違い、本校の歴史と伝統を表してきた花なのである。

毎年6年生が、サルビアの栽培を種段階から行っている。栽培を始めた後に、道德『咲かせ続けようサルビアの花』の学習を設定している。これは校舎改築によるサルビアの危機と、それを助け、サルビア苗の育成を続けている関井氏の営みを教材化したものである。サルビアの育成に情熱を傾ける関井氏の営みと、自分たちが行っている花の世話の大変さや、咲いたときの喜びとが実感的に結びつくことで、歴史の重みを見つめ直し、愛校心を育む学習となっている。

私は正直、はじめのうちは「面倒くさいなあ」と思っていました。でも間違っていました。伏見小学校のサルビアをはじめから守り続けてくれた関井さんと、最初乗り気でなかった自分との違いがはっきりした気がします。関井さんがサルビアを育ててくれたからこそ、サルビアの今があります。今の5年生に関井さんの思いを伝えて、ずっと伏見小にサルビアがあればいいと思います。

今年も慈しんで苗を移植する子供の姿が見られた。



愛知県

はりのある声，温かみのあることばを

名古屋市立弥富小学校校長
野呂妙子

本校は、名古屋市の南東部に位置し、創立135年を迎え、校歌に「木蓮の花咲きて、静かなる丘の上」と歌われているように、高台の緑豊かな学校として、地域の方々に親しまれている。

そんな恵まれた環境の中で育つ子どもたちに、自信をもって自分の良さを発揮できる力を伸ばしたいと願い、「はりのある声，温かみのあることばの響き合う学校」をめざして、国語科指導を中心に、実践研究に取り組んでいる。

今年度は、望ましい子どもの姿を、「自分の心をことばで開き，人とことばでつながる子」「確かな知性と豊かな感性をもち，人を思いやる子」とし，様々な学習活動を取り入れ，その育成を図っている。

もとより読書好きの子どもたちが，さらに，はりのある声で音読や朗読する楽しさを味わい，豊かな語彙や表現力を身に付けていくことをねらいとして，「やとみタイム（モジュール）」を週間課程に位置づけた。週3回，第1校時の15分間，どの教室からも，ことばあそび歌や，詩などを音読したり暗唱したりする声が聞こえてくる。学期に1回，その成果を全校児童の前で披露する「音読発表会」は，発表する子どもたちも，聞く子どもたちも楽しみにしている。

スピーチや短作文も年間計画のもと，継続的に行い，表現技能の向上を図るとともに，友達への理解を深めたり，互いの良さを認め合ったりする心の豊かさも育っていくことを願っている。

来年度には，全国小学校国語教育研究会名古屋大会の会場校という大役をいただいた。大会テーマ「未来に生きることばの力ー知性と感性を育てることばの授業をめざしてー」の具現化に取り組んでいきたい。



埼玉県

学校を中心とした食育推進事業

～地域の食ネットワークを活かした食育の推進～

伊奈町立小室小学校校長
渡辺俊行

伊奈町は，さいたま市の北方に位置する人口約38,000人の町で人口増加の著しい町である。そのため，本年度，小学校1校を開校し，小学校4校・中学校3校が小中連携教育を積極的に推進している町である。

本校は，平成16年度より3年間，文部科学省より「学校を中心とした食育推進事業」の研究委嘱を受け実践中心校として町食育推進委員会の一員として，食育に取り組んでいる。本校と伊奈中学校そして町給食センターの3者の連携の下，食に関する指導全体計画や9年間の指導計画を策定し，総合的な学習の時間への食育の単元の設定も含め，豊かな体験活動を重視しながら食育を推進している。活動組織として三つのワーキンググループ（WG）を設置し3WGを機能的に連携させている。WGⅠは町給食センターでの給食の取組，WGⅡは小・中学校の授業での取組，WGⅢは保護者・地域への啓発事業とし，顔の見える食育や自ら食生活を改善できる実践的な食育を目指している。

特に，本校では，地域の農業生産者や酪農家，調理師・栄養士・調理師を目指す高校生等の食の専門家のネットワークを活用している。食の出前授業，稲作栽培やこむる農園での野菜栽培，わくわくモーモースクール，栄養士やJA女性部の給食指導，子供・親子料理教室，給食試食会，弁当作り，生産者との会食，食育授業公開，食育だよりの発行等の取組を行っている。

これらの取組から，児童生徒・保護者の食に関する意識が高まり，朝食欠食児童生徒数や給食の食べ残しの減少，生産農家の営農意識の高まりなどが見られた。

今後は，食の基盤である家庭・地域への啓発を積極的に推進し，生活習慣の改善を含め食卓に愛や絆や笑顔を取り戻せるよう食育を推進し続けていきたい。



山口 仲美著『日本語の歴史』

(岩波新書)

いちばん身近な日本語史

評者 矢澤真人(筑波大学助教授)

昔の日本語は今の日本語とは違って
いたのだろうと思っても、それぞ
れの時代にどのような変化があったの
かをわかりやすく説明できる国語科の
教員は、さほど多くはないのではない
か。小中高の国語の先生に限らず、大
学の日本語学専門の教員でも、である。

言葉の変化は、総体で一つの方向に
流れていくが、一つ一つの小さな流れ
は互いに影響し合い、複雑に絡み合う。
その時代に、ある言語現象が見られた
ことは示せても、全体をとらえる巨視
的な観点と、個々の相関を分析する微
視的な観点とを持たなければ、なぜ、
その時代に見られ、次の時代には消え
たのかを説明することはできない。
「ぞ・なむ・や・か」の係りは「連体
形」で結び、「こそ」の結びは「已然
形」で結ぶというように「係り結び」
を説明できたとしても、なぜ、古代語
では係り結びが必要とされたのに、近
代語ではそれが使われなくなったの
か、きちんと説明することは難しい。
多くの場合、難解な専門用語をちり

ばめて、読む人・聞く人を煙に巻いて
しまうか、思いつきと不正確な分析を
ざっくりとならべてすませてしまうこ
ろである。ましてや、読んでいてわ
くわくするような筋立てなど、期待す
るのも無理であろう。

ところが、山口仲美氏は、いとも簡
単にこれを成し遂げている。基本的な
用語は、高等学校の古典の時間に出て
くるものくらいで、ときたま現れる耳
慣れない語には、適切な解説がつけら
れている。わからないまま読み進ませ
られることもないだろう。帯に「こん
なに面白いドラマだったのか」という
キャッチ・コピーが載せられている
が、これは、多くの人の読後の感想そ
のままであろう。

教育出版の小学校国語教科書『ひろ
がる言葉6上』にも山口氏は、「さる
は『ココ』と鳴いていた」という教材
を寄せて、擬音語の移り変わりを解き
明かしている。この語り口で、日本語
の歴史を語るのだから、わかりやすく、
わくわくさせられるのも道理である。

甲斐 徹郎著『自分のためのエコロジー』

(ちくまプリマー新書)

エコなエコという発想

評者 佐野正俊(拓殖大学助教授)

エコロジーという語の知名度は高
い。商品にはエコマーク、中高の小論
文でも定番のテーマである。しかし、
その小論文の結論部は「一人一人が環
境を大切に」というパターンになって
しまうことが多いのではないだろう
か。読む側にしても「塵も積もれば山
となる」で終わりでである。エコロジ
ーが生活とつながっていない証である。

そこで、本書の書名『自分のための
エコロジー』を再読してみる。「あたり
まえだ。エコロジーは巡り巡って自分
のためになるんだ」という読みでは
困る。本書が「自分のための」という
ことばで提起するのは、エコロジーな
らぬエコロジーである。エコロジーと
は、環境保護に役立っているのかどう
か実感できない試みを人々に延々と課
すのではなく、「自分の快適さのため
に、環境を利用」したり、快適な「環
境を意図的に作り出す」発想なのだ。

著者は、夏の暑さの正体が気温にあ
るのではなく、体感温度と輻射熱(冷
輻射)のカラクリにあることを明らか

にする。トンネル内が涼しく感じるの
は内部の気温が低いのではなく、トン
ネルの壁の温度が低いからなのだ。こ
れらのことをふまえた著者は、賛同者
と共に植物の空冷力を活かした集合住
宅を都市に建築し、実際に住んでいる。

ここで大事なことは、快適になるため
には、お隣の植栽の力を利用してしま
おうという発想である。このちゃっか
りの連鎖があれば、都市のヒートアイ
ランド現象さえ解決するのである。そ
してこの連鎖(連帯)のために著者は、
自分のためなら協力する、という「エ
ゴ合わせ」のコミュニケーションでの
必要性を説く。感情は調整不可能だが、
利害は調整可能なのである。

不便だが環境的には快適である「依
存型共生」(伝統的集落、便利だが不
快である「自立型孤立」(現代都市)
を超え、便利さも快適さも手放さない
「自立型共生」を目指すという著者の
思想と実践。環境を自らつくるとい
う発想を学習し一般化すれば、知的関心
に応じた柔軟な思考の意義も学べる。

Column

10代心のカルテ

香山リカ (精神科医・帝塚山学院大学教授)



こ

こ10年でいちばん増えた病気はなんですか、ときかれたら、「解離性障害」と答えるだろう。でも、多くの人は「え？カイルセイ？なんですか？」と首をひねる。「心のまとまりがなくなつてバラバラになる、それが解離性障害です」と説明すると、相手はさらに「心がバラバラ：どういうことでしょうか？」と困惑したような顔になる。増えているのにわかりにくい病、それが「解離性障害」だ。

ミサトの症状にも、あえて名前をつければ「解離性障害」ということになるだろう。16歳、高校2年生のミサトは、1年上の先輩に失恋してから、なんとなく調子がおかしいという。

「もちろん失恋はショックだったけれど、もうそこからは立ちなおったと思うんですよ。食欲もあるし夜も眠れるし。でも、あれからなんだかヘンなんです。目の前に膜がなんかあるような感じがして、すべてがぼんやりしてる。今こうやって話している、先生がどこか遠くにいるように見えるし。」

現

実がピンとこない、現実が遠のいて見える。これは、「解離性障害」の中でも比較的、よく起きる「離人症性障害」と呼ばれるものだ。ショックな現実から自分を遠ざけるために、自分の心の一部と他の部分とのあいだに仕切りの壁を作って逃げ込

現実が遠のいて見えるミサト

んでしまった状態だ。

「離人症性障害」は昔からよく知られていたが、一部の原因不明例を除けば、これまではよほど衝撃的なできごとがあった場合にのみ、出現する障害だった。ところが最近、ミサトのような高校生や大学生で、「失恋」「友人とのトラブル」といういわば日常的なできごとがきっかけでこの障害を呈するケースが増えている。それだけ、今の子どもたちの心は傷つきやすいということなのかもしれない。

ミサトには、まずは「失恋なんて平気」と自分に言い聞かせるのをやめて、もう一度、そのできごとを振り返るよう、促した。もちろん、涙が出たり胸が張り裂けそうになったりするかもしれないけれど、「これが現実なんだ」と勇気を持って受けとめるのも必要。それができたら、あとは時間がやさしく彼女の心を癒してくれるだろう。

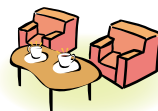
目

の前の現実にはリアリティが感じられない、というこの障害のほかに、「解離性障害」には記憶喪失が起きる「健忘性障害」や多重人格を呈する「解離性同一性障害」などがあり、いずれも子どもや若者にも増加している。なぜ、子どもたちの心が小さな衝撃でバラバラに……？「解離」ということばになじみのない人にとっても、深刻な問題だと思う。

読者のページ

Educo Salon

(エデュコサロン)



●ご意見・ご感想をお寄せください

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

教育出版 Educo編集部

FAX: 03-3238-6975

e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

●「北から南から」呉市立二河小学校の「9年間を一貫したキャリア教育」において、3校の小中一貫教育のカリキュラム「生き方教育」の進路指導は目を引く内容である。義務教育の出口の9年生の学力と生きる力——見える学力と見えない学力等々、数量的な結果がもっと知りたい。
(青森県 工藤 修)

●山田洋次監督の教育に対する思いや考えは「さすが」というほかに言葉がない。子ども(人間)を見つめる視点が何とも優しい。寅さん役の渥美清さんの泥臭い人間らしさと優しくて真っ正直で繊細なキャラクターに心が癒され、安心感、安定感がもたらされるのは、監督ご自身の豊かな人間味そのものであると考えられる。だから監督の作品には常に人の温もりが底に流れていると思うのである。教育に対する信念、思いも真っすぐである。
(北海道 笹原志朗)

●11号ではとりわけ「教師像」について考えさせられましたが、山田洋次氏の「人と人が深くかかわり合う時間がない」というご指摘に問題意識を持ちたいものです。「時間がない」は教師のありようが問題であり、パソコンと向き合う時間を、また、自家用車で学校から走り去る姿を、子どもたちや同僚に向けてほしいと思います。かつて教師は地域ぐるみで地域に居住し、徒歩や自転車、バスで家庭訪問していましたが、そういう、子どもたちの通学路を自分の足で歩く目線子どもたちや地域に向けていきたいものです。
(山形県 佐藤 進)

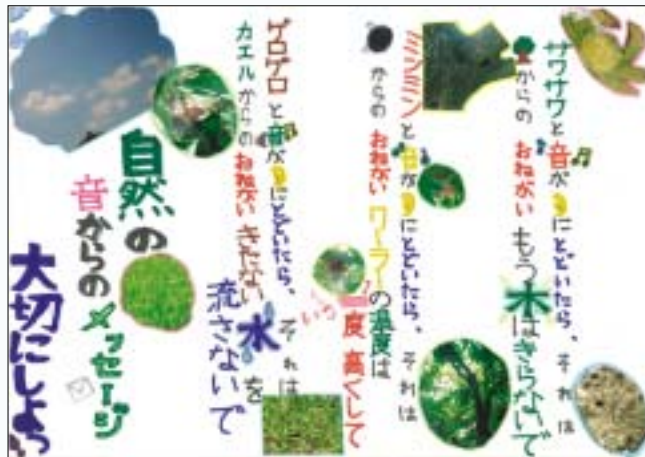
●教員の免許更新制の導入が答申され、具体化しようとしている。しかし、どんなに制度を変えようとも、教師自身の意識改革がなされないと意味がない。「先生っていうのは、子どもとなかよくしているのが仕

事」という山田監督の言葉の意味を再度インプットして、指導力のみならず、人としてのあるべき姿を模索して、研鑽に励んでほしい。
(北海道 榊原勝三)

●巻頭の山田洋次さんの「できない子の側から教育を見直す」を読んで、久しぶりに胸のつかえが一気にとれた感じ。まさに教育の本質を見ぬき、今の問題点を的確にとらえていて、教育に携わる者は、特に今、一番失われている教師と生徒の信頼関係について、この人の言葉に耳を傾けるべきだ。
(大阪府 中川信雄)

●「知っておきたい教育NOW」は、教員が理解しておくべき教員養成と免許制度について、教員免許状の性格、教員免許更新制の導入と更新講習などからわかりやすく述べられており、現場教師必読の一文である。
(福岡県 武末正史)

入賞作品発表



地球と
なかよし
大賞

自然の音からのメッセージ 大切にしよう！

池田史紗 愛知県刈谷市立かりがね小学校6年

サワサワと音が耳にとどいたら、それは木からのおねがい もう木はきらないで
ミネミンと音が耳にとどいたら、それはセミからのおねがい クーラーの温度は一度高くして
ゲロゲロと音が耳にとどいたら、それはカエルからのおねがい きたない水を流さないで
自然の音からのメッセージ 大切にしよう！

【評】「サワサワ」「ミネミン」「ゲロゲロ」と、何と心地よい音でしょう。しかし、それは自然からの叫びにも似たお願いのメッセージだったとは……。そのことを聞き取れる敏感な耳が私たちに求められています。

4回目を迎えた「地球となかよし」メッセージは、今年も命と自然環境を大切にしようという呼びかけにたくさんのメッセージをいただきました。

今回も、昨年に引き続き、環境省、日本環境教育学会、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞の各団体から協賛・後援をいただきました。

募集期間は、夏休みを挟んだ2006年7月1日から9月30日まででしたが、その間に昨年の2倍近い約1,500点の作品が日本全国から、また、海外から寄せられました。

審査委員会は、昨年10月29日に行われ、次の7点が特別賞に選ばれました。また、優秀作品15点が入選し、賞状と副賞が贈られました。さらに、学校賞として、小学校2校と中学校1校の3校が選ばれ、賞状と記念の盾が贈られました。

毎日小学生新聞賞



あさがおのなみだ

角井志帆

山口県岩国市立由西小学校1年

あさ 雨が ふりました。青い 花びらなのに雨つぶの あたった ところだけ 赤く なっていたよ。 おじいちゃんが、「こんな いなかでもさんせいうが ふるんじゃのお。むかしは こんなことは なかった。」と、いってたよ。 わたしはさんせいうの ことは よくわからないけど、おじいちゃんのはなを きいて、花や木を だいじにしようとおもったよ。 なかないで あさがおさん。

日本環境教育学会賞



「小さな小さなイネの花」

北岡 亮

福岡県福岡海星女子学院附属小学校3年

ぼくは、今年の夏、バケツでイネを育てています。夏休みの終わりに、イネに花がさきました。ぼくは、はじめて見ました。花は小さくて小さくて、お米の色をしていました。一つぶごとに花がさいています。ぼくはすごいなあと思いました。

「米」という漢字は「八十八回、人がお世話してできる」ということを聞きました。

ぼくが、毎日食べているごはんを作るのに、こんなに大へんだということをはじめて知りました。お米には、小さな小さないのちが集まっているのだと思います。

【評】「どうしてくれるの」と、花はこちらをにらみつけ、葉っぱは手をつき出しているようです。ごめんなさい。

【評】何気なく食べているお米も、自分で育ててみると、たくさん苦労と不思議に出会います。その心を大事にしたい。

学校賞

広島県尾道市立高見小学校

東京都台東区立谷中小学校

東京都八王子市立第六小学校



地球となかよし メッセージ 2006

◎審査委員（敬称略）

有田和正 東北福祉大学教授
尾崎泰之 環境省環境教育推進室長補佐
角屋重樹 広島大学教授
小澤紀美子 日本環境教育学会会長
東京学芸大学教授
児島邦宏 東京学芸大学教授
高橋康夫 全国小中学校環境教育研究会会長
新宿区立市谷小学校校長
梁瀬誠一 毎日新聞社こども環境・文化研究所長
小林一光 教育出版(株)取締役社長



環境大臣賞

人の手で
佐藤系己里
ニューデリー日本人学校(インド)
中学校3年

人によって今もなお行われている森林伐採。地球の自然は人間だけのものではなく、生き物全ての財産であり、守るべき物だと思います。しかし、地球を破壊してしまう力を持ってしまった私たち人間。今、地球の運命を握ってしまった私たち人間の手で、森林を守っていくべきだと思います。



◎「壊した」ことへの後ろめたさと反省の上に、「守る」ことへの責任と決意が表現されています。さらに「創る」ことへの芽生えがてのひらの双葉に表現されていることを見逃すわけにはいきません。

審査員特別賞



20年後にまた会おうね！
永田彩華

静岡県浜松市 こどもエコクラブ「ART・NEコクラブ」小学校5年

アカウミガメの赤ちゃん、子ガメの放流会で手にした小さな命。小さい体なのに、前足を一生けんめい動かして、海へ向かう姿に感動したよ。子ガメをお母さんガメのいる海に帰してあげられたこともうれしかったよ。でも、海に旅立った子ガメが無事に親になれるのは、「54分の1」と聞いて、自然界のきびしさも知りました。このきびしさに、私たちの生活が原因となるきょういが加わらないように、これからの生活に気を付けようと心にちかいました。20年後、この砂浜でまた会える日を待っているよ。

◎「さようなら」と、ちょっと小首をかたむけた小亀の姿に、無事を祈らずにはおられません。きっと会いたいね。

全国小中学校環境教育研究会賞



コロコロだんごむし
西依葉里奈

愛知県刈谷市立かりがね小学校1年

いつもなかよしのちーちゃんとがっこうのもりもりさんみゃくにきました。そこでかわいいだんごむしのなかまたちにあいました。「コロコロころがるね。」とちーちゃんがいったので、わたしは「こっちのだんごむしはコロタくん。まえまわりがじょうずだよ。」という、ちーちゃんが「こっちのだんごむしはメリーちゃん。2かいてんだあ。すごいなあ。」といいました。ふたりで、ずっとずっとみていたら、おようふくはすなだらけ。おかしくておわらいました。これからはかわいいだんごむし、ぜったいふまないようにあるこうね。

◎二人の顔のやさしさ。それに負けなだんごむしの眼やすがた。ほほえみがこぼれます。「なかよし」そのものです。

毎日新聞社賞



みんなの力で地球を冷やそう！
小形聡司

神奈川県相模原市立清新中学校1年

地球儀を氷で冷やすのは簡単です。でも、地球の温暖化を止めるには、地球に住んでいる私たちひとりひとりの気持ちがひとつになることが必要です。

CO₂削減をして地球温暖化をストップしよう

- 冷房は28℃、暖房は20℃に設定しよう。
- 車をなるべく使わないようにしましょう。
- 車のアイドリングは、ストップしよう。
- コンセントは、こまめに抜こう。
- 買い物で過剰包装は断ろう。

◎地球を冷やす氷は、私たちの毎日の生活態度にあります。まわりのことからひとつひとつ心がけることなのです。



colorful Earth

斉藤理恵

ニューデリー日本人学校(インド)中学校3年

There are a lot of Colors in this world, red, blue, yellow, pink, green, etc... However those colors can be united under one world, So, Let's get together. For the beautiful world, for the peaceful world.



風とだっこしてちゅ

石田あかり

北海道札幌市立屯田北小学校2年

ちょうど風がきたからだっこをいっしょにしておまけにちゅをしてくれるところ。つぎは、もっと高いところでやりたいしもっともなかよくあそびたいです。



大きな大こん

佐藤直人

岩手県盛岡市立太田東小学校2年

ごまつぶみたいな小さな小さな大ねから、大きな大きな大こんができました。ぼくは、大こんをぬいた時、大きすぎてびっくりしてしりもちをつきそうになりました。はっぱは、太陽の光が当たるように、大きく広がっていました。ぼくがりょう手を広げたよりも大きかったです。

ぬいた大こんは、土のえいようをいっぱいすって、太くて長くできあがっていました。土の中でこんなに大きくなっていたなんて、本当におどろきました。

食べてみると、あまくてシャキシャキしてとてもおいしかったです。



一人ではどうしようもなかったよ

久保園 通

福岡県北九州市こどもエコクラブ「カプトガニーズ」小学校5年

ここは北九州市曾根干潟。日本で一番カプトガニが産卵にやってくる場所です。カプトガニは干潟の砂地の部分に産卵にやってくるのですが、この漂着ゴミを乗り越えて産卵することは出来ません。生活ゴミや竹の古本などで覆い尽くされた砂浜は私一人でゴミを取り除こうとしても、ほとんど動きもしませんでした。「大ピンチ!」とは思ったもののどうしていいかわからず、その日は帰りました。少しして行くと、漂着ゴミは綺麗に片付けられていました。「カプトガニを守る会」の人や地元の人たちが片付けてくれたのです。一人ではどうしようもならないことも、多くの人が集まるとすごいと思いました。私達の生まれるずっと前、2億年も前から姿をみかえずに生き続けているカプトガニを私達の時に途絶えさせたくないと思います。未来もずっとカプトガニを見れる曾根干潟であってほしいと思います。だから皆さん海にゴミを捨てないで!



きれいな砂浜をいつまでも

永田理紗

静岡県浜松市 こどもエコクラブ「ART-NEエコクラブ」小学校3年

白くて、長いつばさがすてきなコアシサシさん。南の国から子育てのためにやって来る。わたしも、砂の色とそっくりのたまごヒナを見た時、びっくりしたよ。でも、海がはきはきもいっぱい。つり糸、ゴミのほか、砂浜そのものがせまくなってきているということを知って、かなしくなったよ。わたしは、コアシサシさんが子育てにやって来ることが出来る砂浜がずっとあるように、ゴミはすてない、なるべく二さん化したんそを出さない生活をしていきます。夏になるとやって来るコアシサシさん、これからもみんなが来るのをまっていますよ。



大同川復活大作戦

五個荘中学校科学部

滋賀県東近江市立五個荘中学校2年

僕たちは、昨年度、「大同川復活大作戦」をテーマとし、学校の前を流れる大同川の水質や魚類、水生生物の調査、そして春秋2回の清掃活動を行いました。川には多くのゴミが散乱していましたが、生き物は予想よりずっと豊富な種類がすんでいました。今年度は、『温故知新プロジェクト』と題し、昔の大同川のようすについて、地域の方から情報を集める活動に取り組んでいます。その中から、たくさんのホテルやのどかに回っている水車など、昔の自然豊かな川をうかがい知ることができました。今後は地域の方々とも協力して、ホテルが飛び交う大同川の復活を目指す計画をしています。



メッセージ2006

入

選



色違いの杉

森本 瑛大

富山県氷見市立宇波小学校6年

僕は、学校で色違いの杉の写真を撮りました。周りの杉は、みんな緑なのに、一本だけぼつんと赤色の杉の木が生えていました。僕は、それを見て「きれいだな」「派手だな」「珍しいな」と思いました。家に帰ってお母さんに話すと、「それ枯れた杉やわ」と言いました。僕は、枯れてもあんなにきれいだと言うことに驚きました。でも、きれいだから良いというものではありません。杉も、好きで赤くなっているのではないと思います。杉の「赤」は、森林が破壊されているということへの、警告の「赤」なのかもしれません。



一人一人を大じにしたいな

三浦 美咲

岩手県盛岡市立太田東小学校2年

わたしは、人をまもらうと思います。ちきゅうには、いろいろな人がすんでいます。おじいさん、おばあさん、大人、子ども、赤ちゃん。よそのくにの人たち。からだがふじゆうな人たち。いろいろな人たちがいるから、楽しくなると思います。ときどき、人がしんだり、ころされたりしたニュースを見ると、とてもかなしくなります。みんながやさしい気持ちになって、おたがいにたすけ合ってなによくていければ、つらいことやくるしいことがすくなくなくなると思います。だから、わたしは、人を大じにすることにきめました。



共に生きる

平杉 潤子

ロッテルダム日本人学校(オランダ)中学校1年

この親子たちは自分の家に帰るために、道路を通らなければならぬ。ひな鳥たちはまだ幼く、その辺をうろろして危なっかしい。この間、車で出かける時に、この親子が道路を横断している所に遭遇した。危ない!と思ったが、通りかかったオランダ人が緑のおばさんの様に手を広げて、私達の車を停ませ、親子を渡らせてあげていた。これを見たとき私は、なんだか温かい気持ちになった。人と生物が助け合う。これは地球で生きていくうえで、とても大切な事。最近の世の中は、人が中心で物事が決まっている。そんな事では、他の命が減ってしまう。そうならない為に、互いに助け合い、地球上にいる全ての生物が生きやすい世界にしたい。



び生物育てて自然に返そう

山城 勇樹

大阪府枚方市立山田東小学校4年

生きゴミさんを作ってリサイクルしてほしい。び生物はすごい力を持っています。び生物は二日で野菜くずを食べる土にもどしてくれます。び生物はスプーン一ばいに土を取ると数万びきいます。び生物を使うといことがいっぱいあります。び生物の好きな物は米ぬかです。び生物は野菜くずだったら何でも食べます。び生物は数万びきで働きます。び生物にはいろんな種類があります。び生物が働いている時の温度は45度から60度です。び生物をちゃんと育てないとすぐ温度が下がってしまいます。び生物が働かなくなってしまうのです。び生物はすぐ自然に役立つ生き物です。



しあわせ

光野 萌

広島県広島市 学校法人鶴学園なぎさ公園小学校4年

私は、生き物が大好きです。動物も昆虫も植物も、みいんな。私の住んでいる日本ももちろん好きですが、大自然のあるオーストラリアも大好きです。今年の夏、家族でケアンズに行った時にキュランダ村でユリスシというちょうちんを知りました。そのちょうちんを見た人は幸せになれるという言い伝えがあるそうです。世界中の人が見ることが出来て、世界中の人々が幸せになることが出来たら・・・それが私の願いです。



ありがとう

古川 智康

富山県富山市 こどもエコクラブ「元気マン」小学校4年

豚は生きていた。鳥も生きていた。お米だって、にんじんだって、大根だって、生きていた。牛乳は赤ちゃん牛が飲むはずだった。食べ物には命がある。みんなの命。残さず食べます。「いただきます。」



日本とオランダ

柳沢 萌菜

ロッテルダム日本人学校(オランダ)小学校2年

わたしは、日本とオランダに空色の橋が、かかった絵をかきました。このように、日本とオランダをつなぐ橋があったらいいなと思います。



わたしの名前

宮野 百花

岩手県盛岡市立太田東小学校2年

わたしの名前は、おかあさんがつけました。百の花と書いて、ももかと読みます。おかあさんは、お花が大好きで、おにわでいろいろな花をそだてています。毎日毎日おせわをして、大切にしています。おかあさんは、「百しゅるいぐらいの花をおぼえて、花を大切に育てる子になってほしい」とねがいをこめて、わたしの名前をつけたそうです。わたしは、今、五十しゅるいぐらいの花をおぼえました。これからもおかあさんと一しょにいろいろな花をそだてて、百花という名前のように、いろいろな花をおぼえて花を大切に育てる人になりたいです。



たねの なかの ひみつ

古本 みのる

広島県呉市立渡子小学校1年

あさがおの あおい たねを わると、みどりいろの はっぱが かかれていたよ。たねの なかには、もう はっぱが あるんだよ。すごいね。つぎの あさがおが、たねの なかにあるんだよ。



ほっとな出会い

ISSEY OGATA

「完璧でなくても良い」こと

イッセー尾形さん(俳優・作家)

「イッセー尾形」のデビュー以前から今まで
の三十三年間を思い返して、どんなことも「と
ある偶然」がいくつも重なっていただけで、意
図的に何かしようと思ったことは無かった、と
自分では結論を出している。

僕は作品の中で、やむを得ない状況に追い
込まれて何の言い返しも出来ず、ストレスを溜
めてしまう人格を描くことが多い。ロンドンや
ベルリンの新聞評で「どのキャラクターもまる
で沸騰寸前の鍋のような人物ばかり……」「か
みそりの上を歩くような表現」と書かれている。
僕は、僕の内側に埋もれている不満を、作品を
創ることで表に出して普段は「良い人」で居ら
れるんだろう。

三十三年演出している森田のことを、僕は
ずっと「手を貸してくれる友人」ぐらいに思っ
ていた。デビューしてから十年ほど、その感覚
でいた。彼の手の貸し方はあまりにも巧みで、
僕は全部自分で創っているのだという自信と僕
だけの才能を信じて疑わず何年も経っていた。
一九九七年、森田が病に倒れた時も、僕は
作品創りに関しては何とも思っていなかった。
ただ不運な友人を見舞うのに気が重かった。J
R大塚駅のあたりを通り過ぎる度にあの時の気
分が小さな花屋、定食屋、水道屋、薬局、脈絡
無く並んでいる商店街の風景と重なる。

何回か病室を訪ねた僕に森田は、普段と全
く変わらぬ様子で「尾形、もう来なくてもいい
よ、ネタ作ってるや」と言った。その時僕は廊
下の左側にナースセンターを見やりながら、階
段を下りて表に出た。

翌年の一九九八年「ハワイアンナース」と
いうネタが生まれたことこの小さな時間は僕
の中では何のつながりもない。だが事実この作
品は、それまでやるかたなき不満を抱え込んで
いた一連の登場人物から突然飛び立った白鳥の



演出家・森田雄三氏との出会いから演
劇の世界に。戯曲や小説等を多数著す。
中学国語教科書に書き下ろしも。

ように大きく踏み切っている。

話はこうだ。毎日手術室へとベッドを運ぶ
ナースは、ふとある日、向かいにあるビルの屋
上のビアホールで演奏しているハワイアンバン
ドを見つめる。

場面は、そのバンドの控え室に前触れも無
く訪れオーディションを受けようとする制服姿
のナースだ。

「あなた達のバンドにはボーカルが必要だ」と
彼女が主張する。受け入れ側の見えないバン
ドマン達のとまどいは、誰にでも想像できるだ
ろう。彼女は「夜風に乗って、あなたたちの、
演奏が聞こえてくるような気がして、家に帰っ
て練習したの」「トークも聞いて下さい」とあ
きらかに下手なトークを。

バンドマンはどうやらマージャンの手を止
めて聞き始める。という筋書きだ。今こうして
書き出してみると、僕はやはり森田が、もしく
してこの世から居なくなるのか、と誰よりも恐
れていたのかもしれない、とも思える。

そしてこの作品以後、孤立させられたり、
他人の幸せを羨んで唾を吐く人間は消え始め、
関係することを望むけれども、うまく行かない
事をあきらめずチャレンジする人間像が登場す
るようになる。

ある編集者の方に言われたことがある。
「通常の作家達には、作品を個性的にする為

の破綻願望があるんですがねエー。イッセーさ
んは、和解願望に満ちてますよネ。だけどうま
く行かない」と評されたことがある。

そのうまく行かないことを、僕は森田に受
け入れてもらってかろうじて僕の作品がユーモ
アに転じているのではないかと、と近頃ようやく
思い至るようになっていく。

二〇〇五年六月から始めた、各地でのワー
クショップで、のべ千八百人もの人達との芝居
を作った。

沖縄から札幌までの十八都市のいつどこで
も、森田は見事に一人一人の世界を捜し当てて、
立ち上げてゆく。たった四日間、多い時には
百人以上の人を相手に一日八時間の稽古だ。

「ふうっ、疲れたあ」と土色の顔をしてい
る森田を見て、僕は物好きだなあーとのんびり
と思う。

だが来る日も来る日も、朝になると、
「おーっ。あせるあせるぞ。あと何日で本番
だ？」といったもの元気に戻って現れる姿に、僕
は例のごとくやっぱりうまく声を掛けることも
できず、遠巻きに座って見ているだけだ。

最近ようやく気付いたことだが、参加者の
皆が、そんな僕を全く非難する様子が無い。

それどころでは無く稽古に集中しているの
かと思っていたけれど、どうやらそうではなく
て、参加者皆の中にあるどうにもうまく成立し
ない和解願望の僕が象徴となって、何も出来な
い事を許されているのではないかと、と感じ始
めている。

「完璧でなくても良い」こと、いつもアクティ
ブでいられない」ことはそんなに自分を責めな
くてもいいのだと、皆が静かな山奥の湖畔にた
たずむ面持ちになっているのを僕は今、自分自
身が癒される思いで離れたところで眺めさせて
もらっている。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、
情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。
このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのび
のびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生
きていくこととする優しく大きな心をもつことが求められています。
わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセ
プトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献して
いきます。

決され、今年は、教育の新時代の幕開け
となるのでしょうか。子どもや学校をめ
ぐる問題が多発する中、池上彰さんに今
の子どもの生活や教育についてお話を伺
いました。NHKの人気番組「週刊こど
もニュース」の基礎を作られた池上さん
の柔和なお人柄に似合わぬ鋭い視点と力
強い論調が印象的でした(T)。

- 明けておめでとうございます。『エ
デュコ』も早いもので創刊から6年目を
迎えることになりました。本号より前任
者から編集を引き継ぎ、新体制にあたるこ
とになりました。「地球となかよし」の理
念を貫きながら、常に挑戦し続ける編集
でありたいと考えています。
- 昨年末の国会で改正教育基本法案が可